

古代ギリシアにおける異文化理解の諸相

研究成果の概要

中澤 務^{*,**}

Aspects of Cross-Cultural Understanding in Ancient Greece: Overview of the Studies

Tsutomu NAKAZAWA^{*,**}

1 はじめに

本論文では、本プロジェクトでの筆者の研究の概要をまとめ、その成果を総括したい。本研究では、エジプト古代文明に対するヨーロッパからの理解を解明する基礎的作業として、古代ギリシア人たちが当時のエジプトに対してどのような異文化理解を示したかを検討した。この目的を果たすために、本研究では、紀元前5世紀における古代ギリシアの異文化理解の特徴を、主として、歴史家ヘロドトスの異文化理解の分析をもとに考察した。

ヘロドトスの活躍した紀元前5世紀のギリシアは、独特の異文化理解が形成された時期であったが、その根底にあるのは、当時さかんに議論されていた「ノモスとピュシス」をめぐる問題である。すなわち、当時のギリシア人たちは、社会や文化を分析するさいに、人為的な要因であるノモスと、自然的要因であるピュシスというふたつの側面から異文化を分析し、自文化との対立図式を作り出していったのである。そこで、本研究では、まず、この「ノモスとピュシス」という異文化理解の枠組がいかなるものであるのかを詳細に検討した。2章では、その成果の概要をまとめる¹⁾。

その後、このような枠組を下敷きにして、ヘロドトスにおける異文化理解の特質を、ふたつの典型例を素材として明らかにした。すなわち、スキュティ

ア文化の理解と、エジプト文化の理解である。このふたつの文化は、ギリシア人たちにとって、みずからの文化の対極にある文化であり、ギリシア人たちは、これらの文化をギリシアの文化と対立させ、その相違を際立たせることによって、自分たちの文化を特徴づけていったのである。4章では、これらをめぐる研究成果の概要をまとめることにする²⁾。

2 ノモスとピュシス

2.1 ノモスとピュシス

古代ギリシアでは、ペルシア戦争をきっかけに民族的アイデンティティが強化され、異民族（バルバロイ）に対するイメージがステレオタイプ化していった。異民族に対する意識の変化の中で、紀元前5世紀のギリシア世界では、社会や文化の起源や、多様な文化の異質性をめぐる考察が盛んにおこなわれていた。そのような考察において大きな役割を果たしたのが、ノモスとピュシスという対概念であった。この対概念は、文化をノモスとピュシスというふたつの対立的な概念を通して分析していく概念的枠組みと考えることができる。

これらふたつの概念は、元来は対概念として使われてはいなかった。しかし、次第に、人為と自然の対比を表現する対概念として機能するようになっていき、少なくとも紀元前5世紀中葉には、広く使用

1) 詳しくは、中澤 2014を参照。

2) 詳しくは、中澤 2015; 中澤 2016を参照。

* 関西大学国際文化財・文化研究センター (Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture, Kansai University, Japan)

** 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

されるようになった³⁾。そして、それ以降、さまざまな文献に頻出する対概念となったのである。それはまさに、紀元前5～4世紀の思想における共通の概念的枠組として機能したといつてよい。

2.2 医学思想におけるノモスとピュシス

ヒポクラテス文書のひとつである『空気、水、場所について』は、二つの概念が対概念となつていつた紀元前5世紀中ごろに成立したと考えられる⁴⁾。この作品の目的は、人間と風土の関係性に注目して、人間の病気とその人間が生きる風土的条件（風や水や土地など）の密接な関連を解明するところにある。これを明らかにするために、この作品の著者は、まず前半部（1-11）において、気候や場所が人間の健康にどのように影響するのかを具体的に説明していく。その後、後半部（12-24）になると、著者は考察の対象をギリシアの周辺地域に拡大し、周辺地域のさまざまな異民族の体質や生活様式について、民族学的な視点から考察を展開していくのである。

『空気、水、場所について』後半部において、この作品の著者は、地中海地域を大きくアジアとヨーロッパに区分する。彼はまず、アジアの住民の特徴を、穏やかな気候と豊かな土地に求める。そして、アジアの住民たちは、その風土の影響で、穏やかな性質を持ち、体質も均等であるが、しかしその反面、勇気や忍耐強さに欠けると主張する（12）。その後、彼はアジアの住人たちの体型的な特徴を具体的に引き上げ、そのピュシスとノモスとの関連を説明していく（13-16）。アジアの住民の特徴を説明すると、彼は次にヨーロッパの分析に入るが、アジアとは異なり、その分析は大部分がスキタイ人の身体的特徴をめぐる考察となっている（17-22）。その後、彼は、ヨーロッパのほかの民族の身体的特徴と気質をめぐり、それが部族によって大きく異なっている原因を、ヨーロッパにおける風土の多様性を中心に解明していく（23-24）。

『空気、水、場所について』の著者は、アジアとヨーロッパに住む諸部族の体質と性格の原因を、ノモスとピュシスという二つの要因から分析している。その説明パターンは、次のように分類することができる。

(1) ピュシスを原因とする説明 部族の性格と体形

の特質を、彼らが生活している地域の自然環境（ピュシス）によって説明する方法。

(2) ノモスを原因とする説明 体質や気質の違いを、ピュシスではなくノモスが作り出すという説明。

(3) ピュシスとノモスという二つの原因による説明 種族の持つ特徴の原因を、ピュシスとノモスの両側面から説明する方法。

(4) ノモスによって変化したピュシスを原因とする説明 ノモスが人間の身体的特性（ピュシス）に変化を与え、変化したピュシスが特殊な身体的特性を作り出すという、複雑な原因を想定する説明。

以上のように、『空気、水、場所について』の著者によって展開される説明は、諸部族における性格や体質の違いを原因論的に解明する試みであり、ノモスとピュシスは、さまざまな特徴を作り出す二つの原因として理解されている。

2.3 ヘロドトスにおけるノモスとピュシス

ヘロドトスの『歴史』には、ノモスとピュシスの対概念が明確に登場しているが、『空気、水、場所について』における対概念の使用とは異なる使い方がなされている。すなわち、ヘロドトスには、民族の多様な性格や身体的特徴を生み出す原因を、ノモスやピュシスを通して究明しようとする姿勢が見られないのである。ヘロドトスがおこなっているのは、むしろ、異文化の多様性を、その風習（ノモス）を列挙することによって、記述的に解明していくことである。そのため、『歴史』の中には、バビロン（1,192-200）、マッサゲタイ（1,216）、エジプト（2,35-98）、スキタイ（4,59-75）、トラキア（5,3-10）などの異文化のノモスを列挙する記述が多く登場する。

両者に共通するスキタイ人をめぐる記述を見れば、その違いがよくわかる。ヘロドトスは、4,59-75において、スキタイ人のノモスについて、雑多な民族誌的記述を展開しているが、そこにおいてなされているのは、ノモスの具体的な記述であり、『空気、水、場所について』でなされているような民族的特徴の原因分析ではない。また、そこに登場するのは、ノモスのみであり、ピュシスの側面についてはふれられていない⁵⁾。『空気、水、場所について』と『歴史』には、おそらくは、共通する情報源が存在している⁶⁾。それを考えれば、これらの違いは注目し値するものといえる。

3) 明確な起源については不明。文献に明確に現れた事例として最も早いのは、おそらくフィロラオスの発言であろう（DK44B9）。

4) ハイニマンは、付論においてこの著作の成立年代の詳しい考察をおこなっている [Heinimann 1945: 163-209]。それによれば、この著作が成立したのは、紀元前430年ごろの、ペロポネソス戦争勃発以前のペリクレス時代であるという。筆者もこの分析に従う。

ヘロドトスの主要な関心はノモスにある。たとえば、3,38におけるペルシア王ダレイオスの逸話を見てみよう。ダレイオスは、側近のギリシア人に、どれほどの金をもらったら死んだ父親の肉を食べる気になるかと尋ねた。これに対して、ギリシア人は、いくら金をもらってもそのようなことはしないと答えた。すると、ダレイオスは次に、両親の肉を食べる習慣を持つインドの部族カッタティア人と呼ばれ、どれほどの金をもらえば死んだ父親を火葬にすることを承知するかと尋ねた。すると、彼は大声をあげて王に口を謹んで欲しいと述べたという。ヘロドトスは、この逸話から、慣習（ノモス）の力がいかに強いものであるかを強調し、「ノモスこそ万象の王」というピンダロスの言葉を引用している。

このように、ヘロドトスの関心は、人間に対してこのような強い力を持つノモスのあり方を明らかにすることにある。たしかに、ヘロドトスの記述の中にノモスとピュシスが対置されて登場するのは確かであるが、あくまでも対句表現として登場するのみであり、ピュシスの内実や、ノモスとピュシスの間の関係が具体的に論じられることはほとんどない⁷⁾。

3 ヘロドトスとスキティア

3.1 古代ギリシアにおける異文化理解のタイプ

古代ギリシアの異文化意識の発生と変化は、「バルバロイ」という言葉の誕生と、それが持つニュアンスの変遷と連動する。バルバロイとは、ギリシア語とは異なる言語を話す人々という意味であり、異文化に属する非ギリシア人を、ひとまとめに総称する言葉であった。それゆえ、この言葉は、ギリシア人——非ギリシア人という排他的な二項対立を作り出すのに都合のよい概念であった。このような概念が登場するのは、紀元前490年に始まるペルシア戦争以後のことであり、それがペルシア戦争を通してのギリシア人たちの民族意識の形成と密接に関係する現

象であったことは明らかである。

それ以前のギリシア世界においては、こうしたギリシア民族の対概念としての「異民族」という概念は存在しないか、存在したとしても、明確には意識されていなかった。たとえば、ホメロスにおいては、「バルバロフォノイ」という語が一箇所だけ登場するのみで⁸⁾、バルバロイという語は登場していない。また、ホメロスにおいては、ギリシア語を話す者と非ギリシア語を話す者の区別は明確に見て取れるが、それは必ずしも、ギリシア人と非ギリシア人との差別意識を示すものとはいえない。

本格的な異文化接触の時代を迎え、紀元前6世紀になって、「バルバロイ」という言葉が姿をあらわした⁹⁾。しかし、この言葉が蔑視のニュアンスを最初から持っていたか否かについては明確ではない〔高畠 1988: 314〕。蔑視的なニュアンスが生じるきっかけがペルシア戦争にあったことは間違いないが、しかし、ペルシア戦争勃発後も、しばらくは、そうしたニュアンスは薄かったのではないかと考えられる。

しかし、異文化への蔑視の傾向は、着実に強まっていく。民主制期に入ると、上述のようなユートピア観は消滅し、異文化をギリシア文化よりも劣った原始的な社会とみなす見方が広まっていく〔高畠 1988: 316〕。たとえば、エウリピデスの『アウリスのイーピゲネイア』には、「ギリシアが外国を支配するのは当然ですが、お母様、外国がギリシアを支配するのはふさわしくありません。何故なら、彼らは奴隷で、私たちは自由の民だからです（1400-1401行）」という、よく知られた台詞がみられる。紀元前5世紀には、すでにこのような、非ギリシア人に対する蔑視も存在していたことがわかる。こうした見方は、紀元前4世紀になると、「汎ギリシア主義」といわれるナショナリスティックな自民族中心主義を作り出していく。そこでは、非ギリシア人は、ギリシア人よりも劣る奴隷的存在とみなされた¹⁰⁾。

以上のように、古代ギリシアにおける異文化への

-
- 5) ヘロドトスによるスキティアの説明において、ピュシス的な要素と見なしうるのは、彼らの生活様式に対する風土的な影響であろう。すなわち、ヘロドトスによれば、スキティア人たちは、町や城壁を築かず、農耕をせず遊牧生活を送り、みな馬に乗り弓兵として戦うが、そうした彼らの独特の生活様式は、平坦で牧草に富み、河川が多くて水が豊富であることに由来しているのだと説明している（4, 46-7）。したがって、ヘロドトスの説明にピュシス的な側面は確かに存在しているといえるが、しかしそれは、『空気、水、場所について』においてなされているピュシス的な説明とは、その内実においても、重要性においても、大きな違いがあるといえるだろう。
- 6) たとえば、1,105では、スキティア人に存在する「おんな病」の話が語られているが、これは『空気、水、場所について』で語られる生殖不能者のふるまいと共通する。
- 7) たとえば、2,45には「このような物語を伝えるギリシア人は、エジプト人の性格（ピュシス）にも習慣（ノモス）にも全く無知であるとしか私には思われない」という言葉が見られる。しかし、ピュシスとノモスの具体的な内容は論じられていない。
- 8) *Iliad* 2. 867.
- 9) ヘラクレイトス DK22B107（「目と耳は、バルバロイのような魂を持つなら、人間にとって悪しき証人である」）、ヘカタイオス FGrH 1 F119（「ギリシア人以前には、そこにはバルバロイが住んでいた」）。

態度には、異文化の理想化という側面と、異文化の蔑視という二つのタイプがみられる¹¹⁾。だが、これら二つの態度は、異文化に対する一方的なレッテル貼りをしている側面が強く、真の意味での異文化理解といえるのか疑わしい。では、これらとは異なる態度は存在しなかったのであろうか。筆者は、古代ギリシアには、これらとは異なり、異文化を理解しようとする姿勢も存在していたと考える。そのような姿勢が見られるのは、紀元前5世紀である。この時代は、本格的な異文化接触がはじまり、ギリシア人と非ギリシア人を区別する意識が芽生えはじめた時代であるが、まだ紀元前4世紀に見られるようなナショナリズムの傾向が生まれていない時代である。この時代は、ノモスとピュシスという対立的概念枠の中で、さまざまな異文化の特徴が相対主義的に考察された時代であり、文化相対主義の思想が芽生えた時代であった。

以下では、このような異文化理解の典型例としてヘロドトスを取り上げ、その異文化理解の枠組みと方法を詳しく見ていくことにする。

3.2 ヘロドトスの記述の手法

ヘロドトスは、生涯のある時期に地中海世界各地を旅行し、各地の様子を調査するとともに、そこに伝わる神話伝承や、その土地の社会・習俗などの調査を行なっていった。われわれは、ヘロドトスの旅行の時期や目的については、ほとんど何も知ることはできないが、その根底に、彼の生きた時代における知的風土が存在していたことは、明らかであろう。この時代は、ソフィストなどの新しい知識人が登場し、新しい世界像と価値観を形成していった時代であった。その中で、異文化に対する強い関心が芽生え、民俗学的考察の原型が登場した。ヘロドトスもまた、そのような知的風土の中で、みずからの経験を通して世界を探求したのではないか。

ヘロドトスの著作は、神話的、民俗学的記述が中心に展開する前半部と、ペルシア戦争の歴史学的記述が中心に展開する後半部からなるが、両者には相違がみられる。彼の著作の統一性をめぐっては、これまでもさまざまに議論されてきたが、前半部の考

察は、後半部の歴史的事件の原因を分析するための考察であるとみなすことができ、全体を一つの統一的な著作として理解することが可能である。おそらく、この著作は、一挙に書き上げられたものではなく、少しずつ書かれ、書き溜められていったのであろう。アルトークは、ヘロドトスがそうした著述の一部を聴衆に向けて朗読し、収入を得ていた可能性を指摘しているが [Hartog 1980: 411-424 (Hartog 1988: 273-283)]、同様の指摘を藤縄謙三もしており、筆者もその可能性は高いと考える [藤縄 1985: 111-119]。たとすれば、ヘロドトスは、聴衆のギリシア人たちに対して、非ギリシア世界と非ギリシア人のことを語り、その関心を喚起することによって、他者としての異文化を理解させる作業をしていたことになるだろう。アルトークが指摘しているように、この著作は、みずからの対極に位置する他者を映し出す「鏡」なのだといえるだろう¹²⁾。

ヘロドトスは、異文化という「他者」をギリシア人たちに語り、異質なものを理解させるための様々な技法を持っていた。アルトークは、それを「他者のレトリック」と呼ぶ [Hartog 1980: 331-394 (Hartog 1988: 212-259)]。

ケンブリッジ大学のG.E.R. ロイドは、その著書の中で、初期ギリシアの思想を支配する二つの思考パターンを指摘した [Lloyd 1996]。すなわち、対立思考 (polarity) と類比思考 (analogy) である。ヘロドトスの説明方法も、このような方法の中にあるといえる。

このうち、重要なのは対立思考であり、ヘロドトスにおける対立思考は、「ひっくり返し (inversion)」の方法として現われる。彼は、ある土地や文化の特性を説明するとき、それに対立する逆の特性を持つ土地や文化を取り上げ、それがひっくり返されたものとして理解するのである。典型的な例として、エジプトの習俗の記述を挙げることができる。ヘロドトスによれば、エジプトの習俗は、エジプト独特の風土とナイル川の特異性ゆえに、他の民族とは、ほとんどあらゆる点において、正反対の風俗習慣を持っているという。たとえば、女は市場へ出て商いをし、男は家で機織をするなどである (2.35)¹³⁾。

10) 代表的な論者として、イソクラテス、クセノフォン、アリストテレスなど [cf. Cartledge 1993: 51-57 (カートリッジ 2001: 73-114)]。

11) これは、必ずしも理想から蔑視へという一方的な変化を意味するものではない。ヘレニズム期に入ると、ギリシア人と非ギリシア人の対立を強調する立場は、むしろ弱まっていった [高島 1988: 319]。

12) アルトークは、ヘロドトスの歴史記述を、「鏡」の比喻によって理解しようとする。ヘロドトスの記述が「鏡」であるというとき、そこには三つの意味が込められている。第一は、ヘロドトスのテキスト自体が鏡である。すなわち、ヘロドトスのテキストは、それを読む現代のわれわれにとって、自分たちのアイデンティティを映し出す鏡である。第二に、それは、テキストの読者や聴衆にとって、自らの対極である「他者」が映し出される鏡である。第三に、それは、ヘロドトス自身にとって、人間の住む世界とそこでのギリシア人と非ギリシア人による歴史の展開を描き出す鏡である。

3.3 スキュティアの記述

スキュティアは、古代ギリシア人にとっては、ホメロスの時代からその存在が知られていた地域であり（『イリアス』13.3-7）、ヘシオドスの時代には、その地理的状況もよく知られていたらしい（『神統記』339-345）。古代ギリシア人にとって、もっとも遠く離れた辺境であり、その文化は、みずからの文化の対極にあると信じられていた。それゆえ、スキュティアも、「ひっくり返し」の対象になりやすかったと考えられる。

こうした対極関係は、スキュティアとエジプトの間にも成立している。ヘロドトスの説明では、エジプトは、世界で最も歴史が古く、最も古い知恵を持ち、暑い地域である。それゆえ、エジプトの対極に位置するスキュティアは、世界で最も若い土地であり、最も知恵を欠き、寒い地域なのである。ヘロドトスの世界は、このような対立的なシンメトリーであふれている。

このような世界観を典型的に示すのが、世界の地理的構造に対するヘロドトスの説明である。ヘロドトスの世界観によれば、世界はヘラクレスの柱、タウロス山脈、デルフォイ、シケリアなどを通る中心線によって南北に分けられ、寒冷な土地と温暖な土地に二分される。東西を分ける中心線（ギリシア人にとっての赤道）は、北方のイスタル（ドナウ）川と南方のナイル川によって規定される。二つの川は、同じ子午線上を流れ、いずれも（ギリシア人にとっての）南北の回帰線上で折れて、西に流れていく。エジプトは、リビュアとアジアの間に挟まれた中間地域であり、スキュティアは、ヨーロッパとアジアの間に挟まれた中間地域である。このように、エジプトとスキュティアは、世界の中で、完全にシンメトリカルな位置付けを持つ地域であり、それゆえ、必然的に、あらゆる面で「ひっくり返し」が生じるのである。

ギリシアとスキュティアの間にも、同様の対立図式が成立しており、ヘロドトスは、そのような対立を通して、スキュティアを特徴づけている。以下では、その具体例をふたつ示す。

具体例①：王の身体と王家のかまど

『歴史』第4巻68節に、スキュティアの王をめぐる記述がみられる。それによれば、王が病むと、最も高名な三名の占い師が呼び寄せられ、スキュティア

古来のト占術で、その原因を占う。占い師は、たいてい、国の人間の名を挙げ、その人物が王室のかまどにかけて偽誓をしたためだと述べる。占い師によって名を挙げられた人物は、捕らえられて連行され、罪を問いただされる。否認すると、王は倍の数の占い師を呼び寄せ、占いの結果が同じであれば、その人物は首を刎ねられ、最初の占い師たちにその財産が分配される。だが、大多数の占い師たちが無実と認めると、最初の占い師たちは処刑される。

以上が概要であるが、ここでは、王が国土や臣民に影響を及ぼし、それを豊かにするという通常の関係性が逆転し、臣民の偽誓が王の身体に影響を与え、病気をもたらすとされている。なぜ、このような逆転現象が生じるのであろうか。アルトークは、その意味を「王家のかまど」の持つノマド性に求めている。

第4巻59節では、スキュタイ人の祀る神々の記述があるが、それによれば、彼らが最も重んじているのは、かまどの神ヘスティア、ゼウスとゲー、アポロン、ウラニア・アフロディテ、ヘラクレス、アレスである。ヘロドトスによれば、これらの神には、彼らの呼び名があり、ヘスティアはタビティ（かまど）と呼ばれている。ヘスティアに対する同様の重要性は、第4巻127節においても語られており、スキュティア王のイダンテュルスがダレイオス王に答えて、自分が主君として仰いでいるのは、祖先ゼウスと、「スキュティアの女王ヘスティア」しかいないと述べている。

このヘスティアの重視は、奇妙である。というのも、かまどは家の中心であり、家の固定性を象徴するものだからである。家に定住しないスキュタイ人が、移動を象徴する神ヘルメスではなく、ヘスティアを信仰するのは、なぜなのだろうか。注意すべきは、ここでのヘスティアが、個々人の家のかまどではなく、王家のかまどを象徴するものだという点だ。王家のかまどは国の中心であり、重要な宣誓を行なう場なのである。

ヘロドトスの記述では、王家のかまどは複数形で表現される。それは、かまどが複数存在し、王が移動していたことを示唆する。かまどは、国の地理的な中心ではなく、移動する遊牧民たちの社会的空間の中心なのである。

スキュティアの王陵は、ボリュステネス河の遡航可能な限界点であるゲロイ人の国土にあり、そこはスキュティアの支配域で最も遠い境である（第4巻

13) このようなひっくり返しによる特徴づけは、「ディッソイ・ロゴイ」などの当時のソフィスト文書にも見られ、ヘロドトスに限られない一般的な手法であったことがわかる。

71節)。そのような場所に王陵が存在するのは、遊牧民であるスキュティア人にとって、国土には敵の侵入から守るべきものはなく、守るべき墓は最も遠くに位置すべきだからであるが、それだけではなく、そこには、中心から外れた周縁に中心があるという、スキュティア人のノマド性が表現されているのである。

このノマド性は、王の葬礼においても姿をあらわす。ギリシア人とは異なり、スキュタイ人は、王の遺体を車で運び、各地を移動する。儀式は、言葉なしに沈黙の中で行なわれ、王陵に到着すると、王の家来たちの多くが、絞め殺される。われわれは、こうしたスキュティア王の死をめぐるヘロドトスの描写を、遊牧民としてのスキュタイ人の他者性の表現として捉えることができる¹⁴⁾。

具体例②：サルモクシス

つぎに、ゲタイ人の神サルモクシスをめぐる記事を取り上げる。ゲタイ人とは、黒海沿岸（現在のブルガリア東北部）に居住していた部族であり、彼らはサルモクシス（あるいはザルモクシスとも言う）という神を信仰していたという。ここで注目したいのは、この異民族の神をめぐるヘロドトスの説明の手法である。

サルモクシスをめぐるヘロドトスの記述（第4巻94-96節）は以下のようなものである。ヘロドトスは、まず94節で、ゲタイ人が靈魂の不滅を信じ、死者は神霊サルモクシスの許へ行くと感じていると述べ、ゲタイ人がサルモクシスのもとに使者を送る風習を紹介する。だが、95節になると、今度は黒海沿岸のギリシア人から聞いた話とし、サルモクシスとは実は人間であり、ピュタゴラスの奴隷であったが、やがて神として信仰されるようになったのだと説明している。

サルモクシスをめぐるゲタイ人の信仰と、それをめぐるギリシア人たちの説明の相違は、何を意味するのであろうか。アルトークによれば、94節で示されているのは、ゲタイ人の信仰に対するヘロドトスの記述的報告であり、ここでヘロドトスは、このゲタイ人の信仰を、他者の信仰として切り離し、距離を置いた描写をしているのだという。ここで描写されるサルモクシスのアイデンティティは曖昧であり、サルモクシスは「神霊」、すなわち神と人間の間の中間的なものとして提示される。また、サルモクシスは、ゲベレイジスとも呼ばれるとされ、その名も一

定していない。このように、サルモクシスは、一定した形を持たない、なにか曖昧な存在なのである。

ヘロドトスは、すべての世界において、神はギリシア的な神のみだとする信念を抱いており、このゲタイ人の神を、神として認めていない。ゲタイ人は、雷鳴や稲妻があると天に向かって矢を放つとされているが、この記述は、ゲタイ人がギリシアの神を信仰せず、それゆえ、神そのものを認めていないということを示している。

このような「他者の神」の描写のあと、ヘロドトスは95節において、そのギリシア的な解釈を提示していく。それは、ヘロドトス自身の解釈ではなく、ゲタイ人の信仰を理解しようとする黒海沿岸のギリシア人たちの解釈であり、他者の神に接した黒海沿岸のギリシア人たちが、サルモクシスの理解できない他者性を最小化しようとして作った説明である。アルトークによれば、ギリシア人たちはエジプトを最高の知がある場所と捉え、その対極にある北方の世界は、知について最低の状態にあるとしていた。ピュタゴラスは、エジプトの知恵と関連を持つ。ギリシア人たちの説明では、サルモクシスが知恵を持つのは、そのピュタゴラスと親しんだからであるが、しかし、彼は奴隷であった。ここには、エジプトの知恵がピュタゴラスに伝えられ、それが、質の低い知恵としてサルモクシスに伝えられるという、知恵の衰退が示されている。

さらに、サルモクシスの知恵は、ピュタゴラスの知恵にもとづきながら、似て非なるものとして描かれている。95節において、サルモクシスは、町の有力者を饗宴に招き、人間は不死であり、死後は、永遠の生を受け、あらゆる善福に浴することのできる場所に行くと言っている。これは、ピュタゴラス派における「浄福者の島」の思想を思い起こさせるが、実際には、そこには禁欲の思想が欠けており、その思想の本質を理解しないまがいものなのである。

4 ヘロドトスとエジプト

4.1 ヘカタイオスとヘロドトス

エジプトに対するヘロドトスの関心の背後には、当時のイオニア地方における地理学的、民族学的関心がある。その点で注目すべきは、彼の先駆者であるミレトスのヘカタイオス（c.560-480 B.C.）であろう。ヘカタイオスは各地を旅行し、地理学的著作

14) 死をめぐる描写は、他者性の表現に密接に関わっている。ヘロドトスは、この点について、同じギリシア人の中にも他者性を見ようとしており、第6巻58-60節では、スパルタの王の葬儀が語られ、そこでもアテナイとの相違が強調されている。

を残したと言われる。その著作としては、『世界周遊記 (Periodos Gesあるいは Periegesis)』という題名の地理学的著作がある。これは、ヨーロッパとアジアをめぐる二巻からなるものであり、ヨーロッパ、アジア、エジプト、リビアを記述する。この著作がヘロドトスに与えた影響は、とりわけ、エジプトとリビアをめぐる記述に見られる。ヘロドトスは、ヘカタイオスの著作を、いわばガイドブックとして活用し、その情報源にしたのだと考えられる。

さらに、ヘカタイオスには、『系譜学 (Genealogiai)』(『歴史 (Historiai)』あるいは『英雄学 (Herologia)』とも呼ばれる)があり、その主題は、英雄と半神の歴史にあったらしい。この著作についても、ヘロドトスの宗教的研究に対して大きな影響を与えており、彼の論考を触発するものであったと考えることができる。

以上のように、ヘロドトスは、ヘカタイオスの研究の強い影響を受けてエジプトに赴き、彼の研究を検証し、発展させようとしたのだと考えられる¹⁵⁾。

4.2 エジプトの風土をめぐる記述

エジプトに対するヘロドトスの理解の特徴は、その地理学的考察においても現れているが、それがよりいっそう顕著なのは、エジプトの風習をめぐる記述であろう。エジプトの風習をめぐるヘロドトスの記述は、スキュティアの風習をめぐる記述と共通する特徴を持っており、そこでは、スキュティアと同様に、エジプトの文化を他者として記述する姿勢をみることができる。

エジプトの風習において際立つのは、その反対性である。この反対性は、エジプトの風習のあらゆる面に渡っている。ヘロドトスが挙げている具体例は、たとえば、次のようなものである。

- ・女は市場へ出て商いをするのに、男は家にいて機織をする。
- ・機織は、他国では横糸をしたから上へ押し上げて織るのに、エジプト人は上から下へ押し。
- ・荷物を運ぶのに、男は頭に載せ、女は肩に担う。
- ・司祭は、他国では長髪であるが、エジプトでは髪を切り落とす。
- ・他民族は家畜と別に生活するが、エジプトでは、同居する。
- ・他国では、小麦と大麦を主食とするが、エジプト

ではオリュラという穀物を食べる。

- ・エジプト人は、穀物は足でこね、泥は手でこねる。
- ・男子は着物を二枚重ね着するが、女は一枚しか着ない。
- ・他国人は、船の帆を操作するための綱と、綱を通す環を、船体の外に付けるが、エジプト人は内側に付ける。
- ・ギリシア人は、文字を書くとき、左から右に書くが、エジプト人は右から左に書く。
- ・エジプト人は、神聖文字と通俗文字の二種類の文字を用いる。

このような対立思考は、ヘロドトスにおいて、異文化を理解するさいに多用される思考法であるが、エジプトの文化においては、その点が特に顕著にあらわれている。エジプトの場合、習慣が反対であるだけでなく、その反対性の結果として、文化内での男女の役割なども逆転しており、ヘロドトスが、エジプト文化を、徹底的な反対思考によって理解しようとしていたことがわかる。

このような特徴づけの背後には、ヒポクラテスのような環境的民族論が存在していると考えられる。特に、ヘロドトスは、ナイル川がもたらす風土の特異性と、エジプト文化への影響を考えており、ここでも、地理学的考察と民俗学的考察が関連している [藤縄 1985: 163]。

4.3 エジプトの宗教をめぐる考察

エジプトの習慣をめぐる記述の後、ヘロドトスは、エジプトの宗教をめぐる記述を展開する (37-76節)。このエジプトの宗教をめぐる考察は、たんなる民俗学的関心によるものではない。なぜなら、ヘロドトスは、ギリシア人の宗教を、エジプトに由来するものとみなしており、その関係性を、動物に対する宗教的信仰の分析をもとにして、明らかにしようとしているからである。

ヘロドトスがまず取り上げるのは、牛への宗教的信仰と宗教的儀式である。彼によれば、エジプト人たちは、牡牛をアピス神に捧げられた聖なる獣と見なしており、そのため、牡牛が犠牲のために適したものか否かを慎重に検査するという (38節)。犠牲獣として適格な牡牛は、エジプト人独特の風習によって生贄にされ、その体は焼かれる (39節)。しかし、イシスの聖獣である牝牛は犠牲とはならず、大切に

15) ここから、ヘロドトスのエジプトの記述はヘカタイオスからの剽窃だという批判も生まれる。このような批判は、ポリュビュリオスの時代から存在しているが、T. S. Brownが述べているように、ヘカタイオスの記述とヘロドトスの記述は異なっており、ヘロドトスの記述のほうが内容豊かであるといえる [Brown 1988 77ff]。Howらも同様に、ヘカタイオスの資料の利用は認めるが、それは剽窃とはいえないとしている [How and Wells 1912: 24-27]。

崇拜され、死んだ後は丁重に葬られるのである。

その後、ヘロドトスは、羊と山羊の犠牲を取り上げるが、これらの動物に対する信仰は、ギリシア人の信仰とも関連を持つと考えられる。なぜなら、これらの動物が捧げられる神々は、ディオニュソス、ヘラクレス、ゼウスなどのギリシアの神々と重ねられているからである。

ヘロドトスによれば、ヘラクレスは、もともとはエジプトの神であり、その名も、ギリシア人がエジプト人から引き継いだものである(43-45節)。また、山羊に対する信仰は、エジプトにおけるパン信仰に関連している(46節)。また、一般には、エジプトでは豚と犠牲に捧げることは禁じられるが、エジプトのディオニュソスの祭りでは、豚を犠牲にすることが許されているという(47-49節)。

こうして、ギリシアの神々とエジプトの神々の密接な関連を明らかにすると、ヘロドトスは、ギリシアのほとんどの神々の名がエジプト由来のものである(50節)、神の名だけでなく、宗教的な風習や密儀の習慣も、エジプトから入ってきたものであると主張する(51節)。また、ギリシアの神託についても、もともとエジプトにおけるテバイのゼウスの神託所の巫女が誘拐され、ギリシアに売られてきたことがその由来なのだという(54-57節)。さらに、ギリシアにおける国民的大祭もまた、エジプトに由来するものであるとされ、エジプト各地における祭りの様子が記述されている(58-64節)。

以上のように、ヘロドトスは、エジプトの宗教的信仰とその風習を、ギリシアにおける宗教よりも古い起源を持つ源流であると見なし、その関係性を明らかにしようとしている。

4.4 エジプトの古さとギリシアの新しさ

ヘロドトスにとってエジプトの文化が重要であったのは、スキュティアと同様に、それがギリシア文化を映し出す鏡としての他者であったからだが、鏡としての特質は、スキュティアとは異なっているように思われる。

エジプトの場合、対立を作り出すのは、歴史の古さと新しさである。エジプトはきわめて古い歴史を持つ文化とされるのに対して、ギリシアの文化は若く、つねに若さを保つものと考えられている。これは、ギリシア人たちに共通するイメージであり、紀元前四世紀のプラトンの時代まで継続している。たとえば、プラトンの『ティマイオス』において、プラトンはクリティアスに、彼が聞いたソロンをめぐる逸話を紹介させる(*Tim.*21a ff.)。それによれば、

エジプトのデルタ地帯にサイスという都市があり、ソロンがそこに赴いたとき、彼はサイスの神官に、ギリシアの古い時代の物語を話した。すると、神官はソロンに、「おお、ソロンよ、ソロンよ、あなた方ギリシア人はいつでも子供だ。ギリシア人に老人というものはいない」(22b)と語りかけ、ギリシア人が知るよりもはるかに太古の出来事を語り聞かせたのである。

これと同様に、ヘロドトスもまた、エジプトの文化を古いものと考え、ギリシアの文化がエジプトに負っていることを強調するのである。じっさい、ヘロドトスは、エジプトの歴史が極めて古いものであると信じている。彼は、エジプトの司祭たちの語る王の年代記が極めて古いものであることを強調する。彼によれば、初代の王ミンから、セトス王まで、341世代であり、3世代を100年として、11,340年の年月が経過しているという。これは、実際のエジプト史からすれば大きな誇張であるが、ヘロドトスは、エジプトの歴史が実際にそれほど古いものであると信じていたのだと考えることができる(142節)。

これに続くヘカタイオスの系譜をめぐるエピソード(143節)は、エジプトとギリシアの歴史の長さの大きな相違を示している。それによれば、ヘカタイオスがテバイに赴いたとき、彼は、司祭たちに、自分の系譜は16代続き、その先は神に連なると述べた。すると、司祭たちは、彼を神殿の広間に連れて行き、そこに並べられた司祭たちの祖先の木像を数え上げていった。その木像は345体あったが、司祭たちは、それはいずれも、ギリシア語で「立派な人」を意味する「ピローミス」であり、祖先が神々にさかのぼることはありえないと反論したという。ヘロドトスもまた、この木像をテバイの司祭たちから見せられており、このエジプトの系譜の古さは、ヘロドトスが捏造したものとは考えられない。むしろそれは、エジプト人たちの自己認識を示すものと考えられることができるだろう。

5 おわりに

以上、本研究では、ノモスとピュシスの対立という紀元前5世紀ギリシアの異文化理解の枠組をあきらかにするとともに、それを基盤として成立したヘロドトスの異文化理解の特質を、スキュティアとエジプトという典型例を素材にして分析した。考察の結果をいかにまとめよう。

(1) 紀元前5世紀におけるノモスとピュシスの枠組は、けっして一枚岩ではなく、多様な側面を持つ

ている。ヘロドトスの用法は、医学思想における用法とは異なっており、ノモスにおける異文化間の対立を際立たせることに主眼が置かれている。

(2) スキュティアをめぐるヘロドトスの異文化記述は、二項対立や「ひっくり返し」などの「他者のレトリック」という手法を通してなされている。ヘロドトスのこうした手法は、ギリシア人の伝統的な思考の枠組に発しつつ、紀元前5世紀において成立した異文化理解の枠組を基盤として成立したものだと考えられる。こうしたヘロドトスの異文化理解の枠組は、自文化と異文化の対立の認識の中で、自文化を相対化し、世界全体を相対的な関係性の中で理解しようとする姿勢に基づいている。

(3) エジプトの考察においても、ヘロドトスは、二項対立やひっくり返しなどの手法を駆使して、エジプトを描写し、理解しようとしている。しかし、エジプトをめぐる記述においては、スキュティアとは異なる特徴が見られることが明らかとなった。すなわち、その根底には、紀元前5世紀におけるイオニアの学術的関心が流れており、彼は、その伝統の中で、新しい歴史的探求と歴史的記述の模索をしているのである。

参考文献

Brown, T. S. 1988. "Herodotus in Egypt. (1) The Country," *Ancient World*, 17(3-4).
 Cartledge, P. 1993. *The Greeks - A Portrait of Self and Others*, Oxford University Press. (日本語訳: ポール・カートリッジ著、橋場弦訳 2001 『古代ギリシア人 - 自己と他者の肖像』、白水社).

Hartog, F. 1980. *Le Miroir d'Hérodote: Essai sur la Prerésentation de l'autre*, Gallimard (英語訳: Hartog, F and J. Lloyd(tr.) 1988. *The Mirror of Herodotus: The Representation of the Other in the Writing of History*, University of California Press).
 Heinemann, F. 1945. *Nomos und Physis*, Friedrich Reinhardt.
 How, W. W. and J. Wells 1912. *A Commentary on Herodotus vol. 1*, Clarendon Press.
 Lloyd, G. E. R. 1966. *Polarity and Analogy: Two Types of Argumentation in Early Greek Thought*, Cambridge University Press.
 高島純夫 1988 「古代ギリシアの外人観」、弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ』、河出書房新社、301-325。
 中澤務 2014 「古代ギリシアにおける異文化理解の諸相 (1) -ノモスとピュシス-」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財・文化研究センター紀要)』 第2巻、127-139。
 中澤務 2015 「古代ギリシアにおける異文化理解の諸相 (2) -ヘロドトスとスキュティア-」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財・文化研究センター紀要)』 第3巻、223-236。
 中澤務 2016 「古代ギリシアにおける異文化理解の諸相 (3) -ヘロドトスとエジプト-」、『The Journal of Center for the Global Study of Cultural Heritage and Culture (関西大学国際文化財・文化研究センター紀要)』 第4巻、143-158。
 藤縄謙三 1985 『ギリシア文化の創造者たち』、筑摩書房。

Abstract

In this article I sum up the result of my investigations for the CHC project. The theme of my study was to illuminate the aspects of European cross-cultural understanding of the ancient Egyptian culture. As an introductory study for this theme I analyzed some aspects of cross-cultural understanding of Ancient Greeks in the 5th century BCE. My particular subjects are as follows. 1. Features of cross-cultural understanding of Ancient Greeks through the dichotomy of 'Nomos' and 'Physis'. 2. Features of cross-cultural understanding of Herodotus, especially concerning the cultures of Scythia and Egypt.